

干支学に見る寅年の傾向

著述業・東京恵比寿 RC 井上 象英様

* 基本星 (記号)

現在、私たちが使用する年号は「令和」です。しかし、運氣や運勢などを知る為にはその年や月、そして日々配当されている和暦(干支暦)を知る必要があります。



古代中国「殷」の時代から使用されている暦は「自然周期学」と称され、宇宙の有り様は神の領域でもありましたが、孔子も孟子もその達人だったのです。

これらの星が様々に組み合わせられ、配置されることにより起きる自然のメカニズムが、数百年と経過することにより一定の条件が調った時、発生する自然災害を天災と言います。また、事件や社会情勢など、人間の運氣やバイオリズムにも深く関わりを持つと云うことが解明されております。

そこで最も暦に必要な記号が「十干」と「十二支」と「九星」であります。

干 かん —— 10種類 (甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)

支 し —— 12種類 (子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥)

星 ほし —— 9種類 (一白・二黒・三碧・四緑・五黄・六白・七赤・八白・九紫)

その組み合わせは大きく分別して「36」、「60」、「180」通りになります。

* 十干と五行の関係

「五行」は地球自然界の構成要素で、木・火・土・金・水の五つの気(星)を指し、水を万物の基礎としています。

「十干」は太陽の作用で10日に一巡する天の気。気候や人の精神面に影響します。

陽(○) 甲(木のえ) 丙(火のえ) 戊(土のえ)

庚(金のえ) 壬(水のえ)

陰(●) 乙(木のと) 丁(火のと) 己(土のと)

辛(金のと) 癸(水のと)

* 十二支と月

丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申

酉 戌 亥 子

1月 2月 3月 4月 5月 6月

7月 8月 9月 10月 11月 12月

月

「十二支」は季節の12ヶ月を表し一年の周期現象。12日に一巡する地の気です。

農耕や経済面に影響を及ぼし、天干(幹)に対し地支(枝)としての役割があります。

「干支学」は、

太陽の出没と深く関連し、万物の芽生えから成長、繁栄、衰退、消滅までの活動、物事や自然の変化の実体とそのプロセスを分類し説明したものであり、農耕社会におけるリーダーの心得でもありました。その内容は、自然の仕組みを背景に人生の在り方、暮らしの指針を表わしています。そして、人間が自然と共に暮すための「人道の心」と「あらかじめ準備する」心得を、干支学を通して説明しています。

2022年(令和4年)

壬寅：五黄土星(みずのえ・とら・ごおうどせい) 壬(陽水) —— 十干の九番目。五行では水性(水の兄)の陽気で方位は北。季節は冬。陰が極まって陽気に転ずる時期にあります。「壬」はお腹に何かをはらむ「妊」と同義なので、次の春を待つ大地の中で万物が養育されることを示します。

とくに植物の芽が徐々に膨らんで充実し、成熟を始める様子象っているため、その成長と繁茂は楽しみでもあります。ただ、これ等の稔を収穫するまで、その育てる者の責任が問われるので新しい仕事が多くなることを示唆しています。

また、象形は「I」の貌。これは繊維をまとめる糸巻の軸を表します。

昨年辛から冬の到来を待って、これを冒すので殺傷を伴い、自然のあらゆる物全てが一新する最終段階に移っています。つまり、前年の辛の作用の痛みを春先まで引きずることは覚悟しなければなりません。

寅(陽木) —— 十二支の3番目。五行では木性の陽気の星。方位は東東北(15度)。季節は初春の2月(新暦3月)頃。時間は午前3:00~5:00の夜明け前。寅は「ウ冠」と「人」と「臼」の会意文字。つまり屋敷の中で人が両手を合わせて慎み、共に約束をする精神的な絆の姿を現しています。大漢和では「物を両手でしっかりと包み込みこれを神に捧げる行為」と解説。その意味は行状を慎み身辺整理する時期と教えています。また寅の象意は「演」(えん)。万物が成長し始めて地上に出ようとする意味でもあります。未だ事を成しえぬ丑の次に陽気の発動を促す寅は、周囲との信頼関係をカギとする古体文字なのです。

五黄土星 —— 太極の姿を基本としていて八方位には存在しない。干は「戊と己」ですが支はありません。そして中央には宇宙根元の「太極」(陰陽合体の姿)の貌を現す星が配置されます。季節は特定されず自然循環そのものを象徴し、あえて示すならば、地勢であり万物を貯蔵する大地と言えます。その徳は剛健にして寛容の極み。しかし、地球大地の土気を象徴するので天地間に浮遊する腐敗と殺気作用も合わせて持っています。つまり、自然界を形成する大地にとって無用なものは、有形無形にかかわらず腐らせ、自然に返す働きがあります。

(五黄は二黒星と八白星の特長を合わせ持つ)

* 180前の天保13年は天保の改革が続き、歌舞音曲の禁止令の反面、昌平黌を含め各地に藩校が続々と開かれる。明治に入ると東京遷都と三府制や神祇官組織が誕生。造幣局が設置され株式取引所も設立され近代国家としての仕組みが整って行きます。しかし大久保利道が暗殺され近衛兵の反乱や第一次世界大戦の勃発など、多くの国難を経験する周期に在りました。昭和に入っても上海事変や朝鮮戦争が始まる五黄の寅年です。

そして戦後の昭和37年の壬寅年になり、丑年から始まった日本の高度経済成長は他国から群を抜き、やがてバブル時代に突入します。ただ、過去の歴史から考察すると、教科書問題を含め将来を担う若者達への教育方針が大きく変わった年と言えます。

自然界では桜島の大爆発や三宅島の大噴火、三原山の噴火と大火災の記録が伺えます。

—— 寅年や五黄年の傾向 ——

万事が原点回帰の星盤になるので、整理清算を済ませて次の展開を待つサイクルに入ります。歪みは正される周期です。ねじ曲がったものは正す必要があり、戦

略的な利益を考えて各国が手を組み世界の安定を目指すのではないのでしょうか。
 そこで起こる経済効果、買収や投資のブームが襲来する暗示があります。組織の長は常に想定外を想定して政治を行ない、経済を動かす必要があります。IT関連の快進撃も止まらない。公共インフラの整備など内需的な発展が期待できます。
 丑寅（鬼門）にある年は、ビジネスの基本構造が変わる時代という暗示が伺えます。

福運宮 縁尋機妙 気付き	頂上宮 思慮分別 情報収集	準備宮 臨機応変 確認作業
開運宮 切磋琢磨 有言実行	静観宮 千思萬考 人間形成	喜楽宮 共存共栄 社交力
変化宮 軌道修正 清算作業	困難宮 刻苦勉励 裏方仕事	強運宮 有言実行 貢献活動